特集 「むかしを偲ぶ」より

新田 長次郎

新田ベニヤの創始者である新田長次郎は江戸時代末期の嘉永6年愛媛県に生まれた。
20歳になるまで母の言いつけを守り、家の仕事に精を出していたが、満20歳になった日に書き置きを残して家出してしまう。

明治10年、藤田組製革所に入り、後に大倉組製革所に移る。
明治18年に大阪で独立する。明治24年、十勝の茂寄村の村長がカシワの渋皮を持ち込んだことがきっかけで北海道へ渡る。

明治40年北海道に渡った長次郎は各地でカシワの渋皮を買い集め、新田帯革合資会社を設立。
明治44年から固形タンニンを作り始め、大正13年まで続いた。
ベニヤ板の製造を始めたのは大正8年からのこと。

新田は道庁から払い下げられた土地を小作人に貸して開拓にあたらせ、
またたくまに農地が増え新田農場と呼ばれた。
戦後の農地改革により、農地が小作人に解放されたため、幕別には
新田農場の元小作人だった人が大勢いる。

町民文芸
まくべつ
第12号・1996